

1121
1884

るきまこトマ

著者 主 藤 友



序文に代へて

友人 加藤主計君は大平洋戦争中、読光新聞をやめ、陸軍の受命会社を作り、マラヤに赴き、木炭銃鉄製造の事業に精進した。本書はその回想記録を物語風につづつたもので、これを読むと当時の思い出が頭の中に甦つて来る。

そのマラヤは過ぐる八月三十一日、永年に亘るイギリスの支配から脱し、マラヤ連邦として独立した。これで東南アジアの大部分の植民地は、それぞれ民族主義によつて独立を完成したことになる。東南アジアの諸国が日本にとつて、いかに重要であるかは、その豊富な資源と地理的条件を考えただけでも納得できることと思う。戦争は彼我国民にとつて大なる不幸であつた。だが、この戦争によつて一億数千万の住民が、多年に亘る圧制から脱れ、独立国家として陽光を浴びたことを思えば、不幸は不幸として一面、歴史的意義は認めねばなるまい。

東南アジアの住民は皮膚の色も、容貌も、われわれによく似ている。風俗、習慣、言語のうえにも共通した

ものが見受けられる。今後アジアの友邦として固く手を握り、共に経済の繁栄、文化の向上を図らねばならぬのだが、それには先ず、その国情を知ることが先決条件である。然るに、これら地域に対する国民の認識は概して低調である。これは東南アジアに関する資料、書物などの乏しきによるものと思う。本書は必ずしも、そうした欠陥を補つてくれるものとは言えないが、面白く読んでいるうちに自然に、これら地方の事情が理解できる……一応の知識を得られるというところに意義が見出される。御一読をお勧めする次第である。

昭和三十二年九月

衆議院議員

安藤 覚

は し が き

東南アジアの問題が、にわか大きくクローズアップされて来た。これらの地域が日本にとっていかに重要であるかは、その豊富な資源と地理的条件を考えれば、直ちに納得できることである。

貿易といえは中国かインド、海外発展といえは南米……戦争を境に世界情勢が一転したのに、いまなお、こんな先入観に捉われているものが案外多いのではなからうか？ 過去の夢を追ったり、遠い地域にあこがれを抱かなくても手近かなところに、われわれの生きる天地が残されているのである。

東南アジアを忘れて今日の政治もなければ明日の日本もあり得ない。大戦中、これらの地域に進出した日本人は、軍人、軍属、民間人を含めて数百万を数えるだろう。いまそれらの人々の中には過去を思い出しながら、秘かに南方行きを志しているものが相当多いのではないかと思う。簡素な生活をいとわなければ雨露をしのぐ堀立小屋に、毛布一枚、蚊帳一はりで一年中過ごせる。自然の恩恵は、ろくに働かなくても衣食に窮することはない。住居の構造にも、言語の端にも共通するものが見られる。原住民は容貌も皮膚の色も、われわれによく似ているから親しみやすい。だが、い

まここで、われわれの先祖が南方民族であったかどうかを詮索しようというのではない。ただ、狭い国土に溢れる人口を擁する日本として、今後、民族の生命を、どの地域に延ばしたらいいか、それを考えようというのである。

戦争は原住民に悪感情を与えたが、一面、同色人種として親近感を抱かしめたことも事実である。いまや過去の悪感情を一掃し、全地域に亘って親しみを生かす時期が来ているのである。

本書は戦時中、マライ半島で熔鋳炉を建設している間に起った、さまざまな出来ごとに、熱帯圏の風物、産業、原住民の生活、病気など、日常、見聞した事柄を織り込み、読物風に綴ったもので、すべて事実にも則した体験記に依って、東南アジアの事情を理解してもらおうと考えたのである。ただ、なにぶんにも、十数年前のことを、何一つ記録を持たず、かすかに残る記憶を辿りながら書いたものだから、時間的のズレはもちろん、人名や地名、距離などにも誤りが多いと思う。この点は一切に御容赦願いたい。

なお、シンガポールは戦時中、昭南特別市と呼んでいたが、本文では原名のシンガポールを使うことにしたから、この点も予め御了承をお願いする。

昭和三十三年陽春

著者しるす

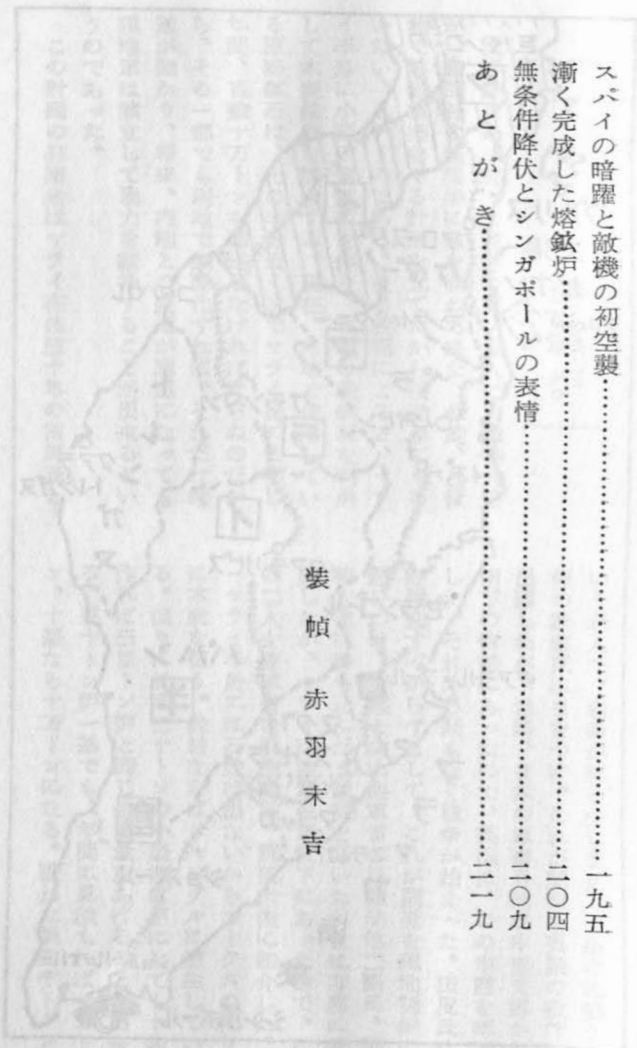
目次

| | |
|---------------|----|
| マライの熔鋳炉 | 七頁 |
| 明暗の歧路、進退に迷う | 一九 |
| マラッカの落陽とドリアン | 二二 |
| 躰ずいた建設工事 | 三四 |
| 案れはじめた社内統制 | 四三 |
| 慰安問題と現地妻 | 四七 |
| 徹夜の賭博と徹夜の仕事 | 五四 |
| 猪？ を撃ち損なう | 五九 |
| 食糧の自給自足 | 六三 |
| 進まぬ築炉工事と怒みの動力 | 六九 |
| 横道に外れた情熱と神経衰弱 | 七六 |
| マラリヤは病気か？ | 八八 |

| | |
|------------------------|-----|
| 數居の高い軍政監部…………… | 九四 |
| シンガポールは別世界…………… | 九八 |
| 地下室の貴金屬、虎の威を借る司政官…………… | 一一一 |
| 彼岸…………… | 一二一 |
| 遅れた責任、首の坐にすわる…………… | 一二五 |
| 參謀長の名を使って威かす…………… | 一三二 |
| 熱帯熱病…………… | 一四一 |
| 五百馬力エンジン廢物と化す…………… | 一四八 |
| 中国人は料理の天才…………… | 一五五 |
| 昭和十九年を送り新年を迎える…………… | 一六二 |
| 軍用電線を盗み出す…………… | 一七〇 |
| 漸く資材が揃う…………… | 一七六 |
| 送電線工事始まる…………… | 一八一 |
| 戦火を身近かに感じる…………… | 一八六 |
| 変圧器を焼く…………… | 一九五 |

| | |
|----------------------|-----|
| スパイの暗躍と敵機の初空襲…………… | 一九五 |
| 漸く完成した熔鋸炉…………… | 二〇四 |
| 無条件降伏とシンガポールの表情…………… | 二〇九 |
| あとがき…………… | 二一九 |

装幀 赤羽末吉



のまで、およそ役に立ちそうなものは、みなマライ人の運転手と中国人の阿媽に分けてやった。私の持ちものはリュックと手下げ鞆一つ、それにキャンプに必要な布団、毛布、蚊帳だけになった。

書籍や書いたものは、他のガラクタと一しよに庭へ持ち出して火をつけた。災天下に赤い焔があがる。私は長い竹竿を持って、うず高く積まれた、ガラクタの山を突き崩していると、火陥の中から一巻の巻ものが転がり出た。手早く竿でかきよせ、手にとった。

「軍人に賜りたる勅諭」と書いてある。

紐をといて読みはじめた。しばらく読んでいくうちに「軍人は……世論に惑はず、政治に拘らず、只々一途に己の自分の忠節を守り……」という文句のところへ来た。言い知れぬ興奮が全身に溢る。

軍人、世論に惑い、政治に関与して国を亡ぼす……

……正しくその通りになったのだ。

戦争によって興隆した国家は、戦争によって亡びる。この因果の理は、五・一五事変以来、常に脳裡から離れなかった幻想だったが、まさか、こんなに早く、亡国の現実にぶつかるとは思わなかった。いままさら悔いても詮なきこと、静かに過去を追想しながら、読みさしの勅諭を火の中へ投じ、また一しきり燃えさかる火焔をしつと見詰めた。

あとがき

シンガポールで別れた二人のうち、経理課長の多木君は、途中、共産匪の襲撃を受けたが、警乗の軍隊に守られ、ことなく事業地に帰り着き、その翌年、社長らと一しよに内地へ引き揚げた。Y社の深見君は、まったくの冒険飛行だったが、サイゴン、台北のコースを経て、奇蹟的に生還した。

スパイ関係で噂された西口君は、終戦のとき同志を糾合し、倉庫から銃器、弾薬類を奪い、制止する同僚にピストルを突き付け、食糧、日用品などと共に、二台のトラックに積み込み、工場を脱出した。このゲリラ隊に参加したものは、修理工の高岡、機械工の畑中、築炉工の広瀬兄弟と事務社員の橋本君であった。広瀬兄弟を除いては、みな自動車関係のものばかりである。

西口君は数年後に日本へ帰って来たということを聞いたが、他のものは戦死したり、ゲリラ隊

に殺されたという話を耳にした。真疑は詳らかではない。

ところが、本年三月、東京の新聞に、つぎのような、アロルスター発の電報が掲載された。

「マライとタイ国境のジャングルに隠れている一人の日本人を呼び出すため、日本語で書いたビラを五万枚、空からばら撒かれ、飛行機はジャングルの上を、すれすれに飛んで降伏を呼びかけた。このゲリラは橋本といい、ビラは東京にいる弟妹からの伝言を書いたものである。橋本さんは大戦中、ケダ州の製鉄工場で働いていたが、終戦と同時に仲間の十人と共に共産匪に投じた。現在残っているのは彼一人だけで、あとは全員、共産テロやマレー政府軍に殺されたり、病死したか、降伏した」

ゲリラ隊は、彼等の仲間のうちで脱出の気配を感じれば、即座に射殺すると聞いている。この呼びかけが、彼に幸いしたか、それとも不幸な結果を招いたかは判らぬが、本書が世に出る頃までに、無事脱出を祈ってやまない。

マライに生きる

定価 一五〇円

著者略歴

明治三十一年長野市に生る

大正十二年読売新聞入社、政治部勤務

昭和十二年政治部次長

昭和十七年退社

昭和十八年日南製鉄株式会社取締役、総務部長

となり、マライ半島に渡航、製鉄工場の建設

に当る。終戦後帰国

著書、下手な政治

著者
発行人

加藤 主計

昭和三十三年五月五日 印刷
昭和三十三年五月十日 発行



東京都豊島区巣鴨七ノ一五六五

印刷者

株式会社 新樹社印刷所

発行所

東京都千代田区神田駿河台三ノ九

光 和 書 房

電話(29)八八三九番